

思ってもみなかった人生 企業人から環境経済学者へ



社員 山口 光恒

（公財）地球環境産業技術研究機構参与

本年一月交詢社から特待社員にする旨の連絡を頂いた。その直後に何か書くようにとのお話を頂き雑文を寄稿する羽目になった。社員になったのは一九七三年二月、当時三十三歳だったので四十五年間社員として過ごしたことになる。今でも現役で午餐会の出席率は余り良くはないが、それでもこれまで参加したうちで森繁久弥さんや新自由クラブ発足時の河野洋平氏の講演時の超満員だった様子、稲山嘉寛氏の競争と協調の話の内容などが特に印象に残っている。とはいえ最も人気があったのは講演後の高橋誠一郎理事長（当時）

のコメントで、これが実に当意即妙、時には講演の内容を離れて自由に自説を述べられることもあり、これを聴きに午餐会に出席をされた方も多かったと思う。入社当時余りに若く、新年の名刺交換会で金子佐一郎氏と同じテーブルに着き、お互いに話題が無くて困ったこと、当時まだ実施されていたクリスマス会に子供達を連れて参加したことなどが想い出される。自分の人生を振り返ってみると、かなりの程度偶然が作用し、結果として思ってもみなかったものであることに思い至った。ここではそのことを書いてみたい。

一九六二年に大学を卒業して東京海上に入社した。

学生時代は就職のことは余り考えておらず大学に就職希望会社を提出する段になって困惑した。友人から東京海上という会社は給料が日本一高く、勤務時間も午後四時までらしいと聞いて早速試験を受けに行った。試験は面接試験だけであったが、面接で志望理由を問われたので給料がとびきり高く勤務時間が短いからと答えたところ君は正直だなといわれ、てっきり落ちたと思つて帰宅したら合格の電報が来た。先ず就職はこゝのように、会社を調べ確たる信念の上に受験したとは到底言えない状況であった。しかし東京海上は自由闊達を社風とし社員の質も高く、結果として本当に良いところに就職出来たと感謝している。

会社では上司・同僚・部下にも恵まれ、それなりに充実した毎日を送っていた。偶然出席したアメリカでの会議で環境問題の重要性に気付き、この研究に深入りし、気がつけば有斐閣や岩波から研究結果を出版するようにになっていた。研究は毎週末麻布の国際文化会館に籠つて続けていたが、当時慶應義塾大学経済学部長であった鳥居泰彦先生から励ましの言葉を頂いたこ

とを今でも鮮明に覚えている。

こうした中である日、慶應の飯田裕康経済学部長から同学部教授就任の打診があった。それまで自分から学者になろうと考えることがなく、正に青天の霹靂であった。結果として一九九六年から慶應で九年、東大で九年、その他大学も入れて約二十年間の学者生活を送り、生活や交友関係は一変した。大学に移ってから研究の中心は気候変動問題（地球温暖化問題）に移り、論文や本を出しているうちに気候変動に関する数多くの省庁の審議会や研究会の委員となり、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）報告書の主執筆者にも指名された。温暖化を巡るテレビの討論会や日経経済教室を中心とした数多くの新聞寄稿によって意見発表の機会も多く、充実した研究生を送ることが出来た。はじめに右も左も分からなかった新米を親切に指導して下さった飯田学部長、細田衛士教授（後の経済学部長）はじめ、異質の闖入教授を暖かく受け入れて頂いた川又邦雄、吉野直行教授など同僚教授にはいから感謝してもし切れるものではない。

研究面は後述するとして、学者になって一変したの

は交友関係である。まず学生である。毎年十一月に中国の清華大学で筆者のゼミ学生と同大学大学院生による気候変動問題の討論会を実施したが、そこに向けての準備過程で彼らの目が輝いていくのを見るのは大きな楽しみであった。この喜びは授業でも体験できた。また、経済学部の同僚教授或いは学会活動を通して知り合った他大学の気候変動専門家との交流は筆者の視野を大きく広げてくれた。

こうした中で筆者にとって一生の宝となった福岡正夫、鈴木孝夫、茅陽一の三先生との出会いと交流は、学者にならなければ得られなかったものである。福岡先生には学生時代に授業は受けたが、お見知り頂いたのは学者になってからである。先生が高名な理論経済学者であることは誰しも承知しているところであるが、九十三才の昨年、近年の経済学の新たな潮流を加えた「新版経済学の考え方」を上梓された。これに加え、蝶と音楽は専門家の域に達しておられ、先生との会話は常に新鮮な驚きの連続である。鈴木孝夫先生は四十五年前に出された「ことばと文化」（岩波新書）以降九十一才の現在でもほぼ毎年新著を出版されてい

る。鈴木先生は言語学者であるが言語の研究から各国の文化の違い、これから進んで日本の将来の指針を示しておられる。国際会議に頻繁に出席していた筆者にとり先生の「武器としての言葉」は最高の指針の書であった。茅陽一先生は日本を代表するエネルギー・気候変動の大家で、とりわけ先生のお名前を冠した「茅恒等式」は世界の気候変動対策の専門家に広く知られている。筆者は以前から茅先生を存じ上げていたが、大学を退職後縁あって先生が理事長をつとめる研究機関にお世話になっている。先生は今でも内外の専門誌を精読され、それを基にご自身で熟慮の上新たな考え方を提示されている。

以上三人の先生に共通するのは常に変わらぬ知的好奇心と世の中を少しでも良くしたいとの強い意志で、こうした意味で筆者は三先生から多大な刺激を受け、そのお陰で現在も研究を続けている。

最後に筆者の専門である気候変動問題に少し触れておきたい。気候変動問題は人類が真剣に対処すべき大きな問題の一つであるが、二年前のパリ協定で合意された目標の達成（気温上昇を工業化以前比で二℃以内

思ってもみなかった人生（山口）

に抑える）は極めて厳しいものがある。この原因はこの目標がバイオエネルギーを大量に用い、排出される年間二百億トン程度のCO₂を地中に貯留するという非現実的な対策を前提にしているからである。現在我々は茅先生を中心に、こうした手段に頼らず温暖化の主要原因であるCO₂排出をゼロにすることを目指し、この為の技術の可能性とそれに向けた障害の克服を目指す提案を世界に発信する準備を進めているところである。この為には化石燃料使用を極力減らさねばならないが、その関連で原子力や、太陽光・風力といった再生可能エネルギーへの対処など課題は多い。

筆者は趣味でバイオリンを弾いている。六十年近い昔ワグネルという団体にコンサートマスターを務めたことがあるが五年ほど前に東京海上のオーケストラに入れて貰った。皆実にうまく、今ではついでいくのがやっつである。最近交詢社ではスタインウェイのピアノ購入に始まりそれを使った音楽会が開かれ、社員にも交響楽団の要職の方やピアノの達人もおられる。楽しみが増えてありがたく思っている次第である。



OECD 貿易と環境会議に日本政府代表として出席